

高齢者施設との交流を通して

熊本県立翔陽高等学校

農業系列（園芸・造園）

1 はじめに

本校農業系列の園芸や造園について学んでいる3年次生の「総合的な学習の時間」の取組で、これまでに学習したことを活かして地域に貢献したいという思いがあった。そこで、近隣の福祉施設である社会福祉法人光進会の地域密着型特別養護老人ホーム喜寿園及びグループホーム光喜園にご協力をいただき交流をさせていただくことになった。

2 交流内容

(1) 利用者の方々へのアンケート

まずはじめに行った取組はアンケート調査で、生徒の計画ではプリントを準備して利用者の方に配布する予定であったが、実際に訪問しお話をさせていただく中でとても困難なことがわかり、一人ずつ聞き取りの形でアンケートを行った。内容は、施設的环境についてや好きな花、色などこれからの交流に活かすことができるもので、アンケートの結果から、まだ施設内の緑化が進んでいないため、もっと緑がほしいとの意見が多くあった。



(2) 盆景づくり

利用者の方々と一緒に活動できる取組として、造園の授業で行った「盆景づくり」を計画し実施した。利用者の方々に説明をするための練習や室内でも床を汚さない工夫などいろいろな準備をして臨んだ。交流当日は、約20名の利用者の方々と一緒に盆景をつくり、趣味で盆栽をされている方から逆に指導していただく場面もあった。皆さんとても喜んでいただき、あっという間の時間となった。また、完成した盆景は、施設内の各ユニットの入り口に設置し、盆景を置く台については、本校の建築を学ぶ生徒に製作を依頼し、簡単に取り外しができる台を設置することができた。



(3) 壁掛けプランターの設置

何度か交流をする中で、施設のまわりに設置してある黒色のフェンスがとても寂しく感じ、施設の方からもなにかできないかと相談があったため、「ハンギングバスケット」を設置した。設置するときには、季節の草花を植えて、利用者の方々から見えやすい高さや位置を考慮した。設置するときには室内から見ていただくことを中心に考えていたが、設置後は利用者の方々から散歩ルートとしても喜ばれているという話を聞くことができた。設置した時期が11月下旬だったことで、暖かくなってから多くの利用者に喜んでいただける取組となった。



(4) 洋風中庭の作成

今回の交流のメインとなる取組で、約2ヶ月の時間をかけて制作した。中庭は建物の明かり取りとして造られた空間で、施設の理事長からもいずれは植物をおいて見栄えのする場所にしたいと思っていたと聞き、これまでに学んだ造園の知識と技術を活かして洋風の空間を制作した。施工内容は、ウッドデッキや木製のプランターカバー、人工芝、歩くことができる砂利の通路など、利用者の方々が廊下から見ても癒やされ、外に出て季節を感じることができる憩いの場所を目指した。利用者の中で車いすを利用されている方が多くいらっしゃることもあり、バリアフリーでウッドデッキに出られるように工夫した。また、ガスのボンベの目隠しやベンチ、プランターカバーについては、本校の建築を学ぶ生徒と近隣の天津支援学校高等部の木工班に依頼し予想以上のすばらしい空間にすることができた。



(5) 花壇の土壌改良

施設の玄関前には花壇があり、マリーゴールドが植えてあったが、石がごろごろと入っていて、植物が生育しやすい環境ではなかったため、石を取り除き、土壌改良のために堆肥や腐葉土を混ぜ込んだ。その後、冬の花であるプリムラやパンジーなどを植栽して新しい花壇を作成した。計画では、とても寒い時期ということもあり、高校生だけで行う予定だったが、高校生の姿を見て利用者の方数名と職員の方が寒い中、わざわざ出てきていただき、一緒に実習を行うことができた。「ありがとう」「お世話になります」など暖かい言葉をたくさんいただき、自分たちの活動によって、利用者の活動の場をつくることができたことでこの活動が地域の方々に貢献できたと感じることもできた。



(6) 完成報告会

平成29年12月13日(水)に喜寿園の多目的室にて「完成報告会」を行い、今回の交流に係わった本校の工業系列(建築)の生徒及び天津支援学校高等部木工班にも参加していただいた。施設の理事長様や利用者の方々、職員の皆様よりたくさんの感謝の言葉をいただき、生徒たちの表情はとても満足げであった。



3 まとめ

この取組は、地域の方のために何かできることをしたいという思いからはじめた交流でしたが、交流を重ねていく中で、利用者の方々や職員の方々から多くのことを学ばせていただくことができた。今回交流させていただき、生徒たちがイメージした以上に配慮が必要で、交流する度に考えて行動したことで生徒の成長が見られた。また、農業を学ぶ生徒と工業を学ぶ生徒そして支援学校の生徒が協力してひとつの取組を達成できたことで、今後も視野を広げて様々な活動ができるということの後輩にも示してくれた。